白金葭

七月号

平成２５年７月発行　第２９号

白金葭定例句会案内

八月十五日(木) 9:30～11:00 蓮見舟吟行

九月二十日(金) 12:00～15:00 句会(アビスタ第三学習室)
12:00～15:00 (アビスタ第三学習室)
兼題:十五夜、胡麻

十月十八日(金) 12:00～15:00 (アビスタ第三学習室)
兼題:落花生、御命講

蓮見舟、終戦記念日の参考句（八月十五日分）

雲間より光を集め蓮開く　敬司
舟に身を委ね八月十五日　敏子
万歳のかたちに蓮の咲きにけり　孝三
終戦日喪章のごとく鵜の寄れる　陽一
象鼻盃雲の間より日のさして　多美子
母好む金平糖も盆の菓子　紀子
盆過ぎて乏しくなりぬ花蓮　悦子
青鷺の飛び立つ杭の少し揺れ　高志
一穂の稗なし早稲は穂を垂らす　宏之助
高圧線目高の泳ぐ用水路　敦子
蓮酒を阿片患者のごとく嚥む　幸一
吾へ向く蓮八月十五日　昊司
手賀沼の沼のにほひや蓮見舟　弥栄子

月例句会報（13／7／19　7名　欠投句3名:プール、甜瓜）

豆腐屋の喇叭がとほる桜桃忌　飯田孝三
五月雨を力車長髄（すね）彦の裔
青竹は男子（おのこ）の匂ひ素麺流し
「タスケテー」父に抱かれて初プール
遊び呆けてや祖母の冷し真桑

甜瓜昭和と我等滅びたる　増田陽一
楽譜めくる森の深さを夕蜩
硝煙のシルクロードや甜瓜
鍬形を拾はむとして挟まるる
深海の如くに夜のプールあり

ごろごろとたてよこにあり甜瓜　増田悦子
甜瓜枕にすれば空青し
鯛などと泳いでみたきプールかな

おほかたは歩いてゐたるプールかな
朝のプール私の波が向うまで

そこここに小判色なる甜瓜
反響のプールの子らと指導員
百姓のほつたらかしの甜瓜
黙々とプールに泳ぐ一作家
プールべり歩く選手のよき姿

プールぢゆう蛙泳ぎの授業かな
区切られてプールの中をただ歩く
海水に笊ごと冷す真桑瓜
ドーナツと云ふ子輪切りの真桑瓜
虎の尾の日に染む白さ佇めり

児童らの朝よりプールごじやごじや
出歩きの畑で貰いしまくわうり
神様を枕にしている昼寝莫蓙

光成高志

黴臭き蔵は今でも舟を吊る
百日紅犬と僧侶の立ち話

亡き母の羅まとひ歌舞伎座へ
小学校のプール開きのにぎわひに
炎天をきて満員の図書館に
車座に胡坐の男甜瓜
梅干してひとつ年とる夕べかな

吉羽多美子

大島の夜の火の遠きプールかな
本腰の三国峠の雷となりぬ
形代を霧が飛ばせる湯殿山
雄叫びの三国峠の夕立かな
字を知って苦のはじまれる餓鬼忌かな

松村幸一

まくわうりどんな味かと母に問う
七夕や聞きだす孫のねがいごと
小さな手プールの水をすくいなげ

浅野正美

光　みち

青木啓泰

きかん気のつむじ二つや庭プール　みち
声援がプールサイドにわきあがる　正美

杉浦弥栄子

窓開けて午睡の後の真桑瓜　〃
七夕や猫の家出に願掛けて　高志
三軒目の店先に座す真桑瓜　弥栄子
文字一字書きて溜息盆支度　悦子
夕暮れて蛸を一口半夏生　〃

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

3　深海の如くに夜のプールあり　陽一
3　黴臭き蔵は今でも舟を吊る　啓泰
3　形代を霧が飛ばせる湯殿山　幸一
2　プールぢゅう蛙泳ぎの授業中　みち
　プールぢゅう蛙泳ぎの授業かな
2　「ダレカタスケテ！」父に抱かれ初プール　孝三
　「タスケテー」父に抱かれて初プール
2　ごろごろとたてよこにあり甜瓜　悦子
2　甜瓜昭和と我等滅びたる　陽一
2　出歩きの畑で貰いしまくわうり　啓泰
2　区切られてプールの中をただ歩く　みち
2　小さな手プールの水をすくいなげ　正美
2　七夕や聞きだす孫のねがいごと　〃
2　百姓のほったらかしの甜瓜　高志
2　夕暮れて蛸を一口半夏生　弥栄子
2　おほかたは歩いてゐタルプールかな　悦子
2　朝のプール私の波が向うまで　〃
2　亡き母の羅まとひ歌舞伎座へ　多美子
1　小学校のプール開きのにぎわひに　〃
1　七夕や猫の家出に願掛けて　弥栄子
1　五月雨を力車長髄（すね）彦の裔　孝三
1　窓開けて午睡の後の真桑瓜　弥栄子
1　炎天をきて満員の図書館に　多美子
1　本腰の三国峠の雷となりぬ　幸一
1　三軒目店先に座す真桑瓜　弥栄子
　三軒目の店先に座す真桑瓜
1　青竹は男子（おのこ）の匂ひ素麺流し　孝三
1　大島の夜の火の遠きプールかな　幸一
1　甜瓜枕にすれば空青し　悦子
1　きかん気のつむじ二つや庭プール　正美
1　梅干してひとつ年とる夕べかな　多美子
　そこここに小判色なる甜瓜　高志
　文字一字書きて溜息盆支度　弥栄子

百日紅犬と僧侶の立ち話　啓泰
豆腐屋の喇叭がとほる桜桃忌　孝三
車座に胡坐の男甜瓜　多美子
鯛などと泳いでみたきプールかな　悦子
黙々とプールに泳ぐ一作家　高志
神様を枕にしている昼寝莫莨　啓泰
声援がプールサイドにわきあがる　正美
遊び呆けてや祖母の冷し真桑　孝三
楽譜めくる森の深さを夕蜩　陽一
海水に笊ごと冷す真桑瓜　みち
反響のプールの子らと指導員　高志
ドーナツと云ふ子輪切りの真桑瓜　みち
まくわうりどんな味かと母に問う　正美
硝煙のシルクロードや甜瓜　陽一
雄叫びの三国峠の夕立かな　幸一
児童らの朝よりプールごじゃごじゃ　啓泰
字を知って苦のはじまれる餓鬼忌かな　幸一
鍬形を拾はむとして挟まるる　陽一
虎の尾の日に染む白さ佇めり　みち
プールべり歩く選手のよき姿　高志

一句鑑賞

形代を霧が飛ばせる湯殿山　光成高志　幸一

形代が霧に飛ばされた湯殿山神社での夏越の大祓の一場面を詠った句である。吾ら俳人は直ぐ芭蕉の奥の細道の出羽三山の稿を思い出す。芭蕉は陰暦の六月五日に羽黒山神社に参詣、六日には月山に登って行者小屋に一宿、翌七日に湯殿山へまわり、その日の夕刻南谷に帰って、八日は休息、九日に注連を納めた。宿坊に帰ると、阿闍梨の依頼によって、三山巡礼の句々を短冊に書く。「涼しさやほの三日月の羽黒山」「雲の峰いくつ崩れて月の山」「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」「湯殿山銭踏む道の涙かな（曾良）」の四句を三山三様に書き分けている。形代の句が、以上の芭蕉のテクストの喚起にはなっているが、転換まで行っていない憾みがあると思います。

朝のプール私の波が向うまで　悦子

朝一番の入水の時の自分の体が起こした波が向こうまで伝わって行く様が目に見える。「私の波」と表現した効果によって、波の行方を目で追うほんの一時の静寂と幸福感がよく想像される。こういうなんのてらいもない計らいもない句が悦子さんの本領である。

区切られてプールの中をただ歩く　みち

近頃のプールは泳ぐ人が全体の半数いるかいないか、残りの半数は、水中ウオーキングか水中体操をしている。後者はインストラクターがプールサイドで体操をし、それを水中で皆が真似をして水中体操をする。空中のイン

ストラクターの動きはどうしてもぎこちなくなるし、しんどそう。一方25ｍプールの二コースをフリーにしてただ歩く人のために開放している。まさしく区切られたコースのみの水中ウオーキングである。膝や腰の悪い人のリハビリテーションの場でもある。

字を知って苦のはじまれる餓鬼忌かな　　幸一

餓鬼忌にかこつけて、読書家の幸一さんならではの抱懐の句である。芥川龍之介の「人生は地獄よりも地獄的である」（侏儒の言葉）など言葉を残して自殺したのは、結局言葉を知ってそれを表現する文字を知ったからで、仮に言葉を知らず字がなければ、字を知らなければ、人生の苦しみはなかったのではなかろうか。かように想像した作者は、恐らく、龍之介の苦しみを己の苦しみとする苦悩を経験された筈だ。古代人は、文字がまだなくて皆記憶しておかなければならなかった。だから、頼れるのは自分の記憶力だけであった。文字が発明されて、人間は文字に心を託するから、記憶力が弱くなり、考える力も弱くなったのだ。便利な物に頼ればそこからむしろ苦しみが始まる。そういう便利且得意なところから人は扱けてしまうのだ。こういう箴言のような言葉も俳句の素材になるのです。それも、餓鬼忌という季語のもつ力が大きいからでしょう。

一句鑑賞（28号分）（その一）

飯田孝三

降り頻る東京八景桜桃忌　　みち

八景といえば、近江八景、金沢八景など、その他の八つの景勝地。瀟湘八景に倣う。そも「八」は多、八重垣、八岐大蛇、八百代言、嘘八百等々。降り頻る雨に煙る、太宰ゆかりの東京の地が、入れ替わり立ち代り、眼前に立ち現れる。「東京八景」は太宰の代表作の一つ。いわば付き過ぎ、だが、それを全く消し去って妙。とりも直さぬ「降り頻る」の面目である。入水以後一週、連日、新聞社会面を賑わした、上水縁は滂沱たる梅雨景色が、俄かに甦るのだ。正攻、本丸を衝く外連ない桜桃忌の一句である。めりはりある口誦もいい、あれから六十五年、むべ鬱も今は昔。とはいえ忌の集いは年々賑わう不思議さ、はてさて。

桜桃忌打ち殺されし腹の虻　　高志

どの作品か記憶は定かではない、『人間失格』だったかな、ある太宰作品中の一シーンを踏まえる。のどかに牧草を食む牛の腹や尻の回りを虻どもが、飛び廻っては血を吸う。悠揚、咀嚼反芻、全く意に介さぬ態と見えた牧牛が、突如、しなやかな尻尾を一振、虻を打ち払う、殺す。著者驚愕の一瞬である、そこに自らの娑婆体験を重ねるのだ。作品名は朧だが、太宰の気質、心情を象徴す

る場面として今も印象鮮明である。掲句は、牧牛の腹にまつわる虻に太宰の投影を見るのだ。上中に畳むｉ音が痛々しい、～ハラノアブの韻は太宰呆然の気に通う。

太宰の日ひとつ摘みしさくらんぼ　　悦子

さくらんぼは、今が旬。紅玉の一粒を口にふふむ。そうそう、今日は桜桃忌。ふと、あの遠い日の出来事を思い起こすのである。その頃、十歳代も漸く半ばだったろうか、胸中を去来するのは何だろう。「太宰忌の」～では、短絡、句になるまい。「～の日」の間合いがいのち、そして。～ノヒヒトツツマミシ～と続く音の膨らみが。え？「太宰の日」は季題、傍題にもない？いやいや、俳句はそんな不自由な文芸ぢゃあない。「太宰の日」といえば、その忌日を思わない者はいない。幸いなるかな桜桃の一粒。

一句鑑賞　ix（28号分）　　武者昭七

両側に海桐花の荒磯遊歩道　　高志

東尋坊の沖ゆくタンカー夏薊　　みち

東尋坊紀行楽しく読ませていただきました。東尋坊を訪れるひとは多くとも荒磯遊歩道まで足を向けるひとは少ないようです。海を眺め松籟を聞きながら点在する詩碑などを楽しみゆっくり歩き回ると天下の観光東尋坊とはまたちがった北陸の味を楽しめるので僕は好きです。「とべら」は長楕円形のつややかな葉が陽の光をはじいてきらめく初夏にほんのり匂う白い小さな花をつけ、秋には実がはじけて紅い種子が中からのぞく。潮風に耐えながら清楚さをたたえた花。それが遊歩道に沿って続くのが嬉しい。初めて歩いてもいつか歩いた道のように思えてくるのはそれが僕らの記憶に刻み込まれた原風景だからでしょうか。沖にはタンカーが白い船体を見せて遠ざかる。達治の「春の岬」に通う景色です。

桜桃忌商店街は斜陽である　　啓泰

桜桃忌はもちろん普段でも賑わっていた商店だが今はひっそりとシャッターおろした店が目立つ。商店街も「斜陽」だなどしゃれている場合ではないという怒気が強い断定的で型破りの口語調に爆発するところがすごい。

五月雨や雷神風神吊提灯　　孝三

雷門といえばだれでも丹塗りのあの巨大な門をそれに続く仲見世のにぎわいと一緒にイメージするけれどその左右に風神雷神がどっかと控え、天井から大提灯が頭上を覆っているのに思いを致すものは少なかろう。二句め以下の連音は氏が大好きな楽しいお遊び。五月雨の降りようでもある。

梅匂ふ真暗闇の厨から　　多美子

ものの匂いは夜こそまさる、とは徒然草に在った言葉と思うけれど真っ暗闇の厨から流れてくる甘酸っぱい梅

の香りは新しい季節の香りであり、生きてあることの喜びの香りでもある。さりげない詠み口だけれどこの一句、巡る季節の賛歌であり、つつましやかにいのちの賛歌と拝見した。

一句鑑賞（28号分）

松村幸一

江東の泥をさがしに夏燕　孝三

芥川龍之介に「本所両国」なる端麗明澄な名文章がある。本所育ちの芥川は久しぶりに歩いて回った関東大震災直後の大川端を見て、この川はもはや「歴史的大川端」となり変ったと嘆いた。「両国駅の引込線をとどめた三尺に足りない草土手」だけが昔のままだったと吐き捨てるように記した。ありし日の江戸の残光は震災によって息の根を絶たれたと心に銘じた芥川はその二ヶ月後に三十六歳の自らの命を絶った。江東区の歴史は太平洋戦争後になっても、「江戸前」時代につづく埋立に次ぐ埋立の歴史。変りに変った江東の水と泥の記憶の空に、今日も燕の懸命な生活の営みがある。どう変り果てようと江東を描いて終の棲家はないと心に決めているかのように。

桜桃忌今日の一日は津軽弁　弥栄子

この作者を津軽の人と考えたい。太宰治の読者は時代により年齢により、太宰体験の質をいちじるしく異にする。その上この作者が同郷人だったとすると、思いは一層複雑かもしれない。ともあれ今日は桜桃忌。久しく使わぬ津軽弁が、意識的にか無意識的にか頻出する。ふるさとと人との出会いでもあったのか。来し方を包んで作者の今日の境涯が、さりげなくにじみ出る一句ではなかろうか。

赤坂乃木坂地下鉄のあやめかな　陽一

赤坂桧町（この町名、今もあるのだろうか）に東部六部隊の兵営があって、ぼくはここで、絶えず誰にも言えぬ脱営衝動に脅かされながら初年兵時代をすごした。よく気違いにならなかったと、降りかえって今も冷たい汗が生じる。乃木坂界隈を三八式歩兵銃をかついで、何度か行進させられた。句またがりの重い名詞を追ってあやめというやさしい止めの花に行きついたとき、改めて牢獄にひとしかった来し方を慰撫される思いに息づいた。個人的な読みに即きすぎると承知しつつ、こういう句に出合えるのも俳句の徳と考えたい。それも長生き出来たからこそ。

夕星が二つ離れて桜桃忌　啓泰

夕星の一つを同伴者となった山崎富栄と解して間違ってはいまい。しかし山崎富栄には、無理心中説、他殺説、絞殺説といういわれなき妖婦まがいの俗説が、今も正されることなく罷り通っているのではなかろうか。しかし検屍の現場に立ち合った誰からも紐で締められた痕など

なかった、という証言者はあっても、いやあった、という証言者は一人も現れていない。けれども他殺であろうとなかろうと太宰の文学に関係ないよ、という声は今もあろう。実はぼくも長いことその一人だった。だが、太宰治の滅びの命に最後の白熱光を添えて共に殉じた女の真実が、六十五年後の今も殺人者の濡れ衣のままだとしたら、太宰が救われない。ごまんとある桜桃忌の句の中で、二人への鎮魂の思いを夕星に託したこういう句がやっと登場して来た、という感慨をぼくは抑え難い。「並びて」ではなく「離れて」であっても。

五月雨や豆腐づくしにもてなされ　　多美子

原句は「豆腐づくり」だったが。お豆腐といえば、昔根岸のぼくの家から「笹の雪」まで十分ほどの距離。ぼくの父も母も豆腐が好きで笹の雪の豆腐を生きている間に一度位は食べに行きたいネと枕元で話し合うのを、子供の耳に何度か聞いた。ひどい貧乏暮しで、笹の雪ののれんを一度もくぐることなく親は死んだ。こういう句に出合うと今更のように、そんな些細な夢さえ叶えさせてやれなかった親への哀憐で胸が熱くなる。折節の五月雨の音がしみじみと切ない。

（今回まだ予定している句がありましたが、長くなりそうで五句に絞りました。自分の経験に即しすぎる読みと知りつつ変えられませんでした。御寛容願います）

一句鑑賞（28号分）（その二）

飯田孝三

桜桃忌商店街は斜陽である　　啓泰

修辞「である」が眼目。夕日がアーケイド内まで差込、軒並みシャッターを下ろした商店街のありさまをまざと目に見せる。その一角に売るサクランボを目に止める。時あたかも桜桃忌、知らんぷりで『斜陽』をふまえ、機知に富んだ世相風刺の一句である。「桜桃忌」と「斜陽」はずばりつき過ぎ、敢えてして、毫もそれを感じさせない。即ち「である」断定の妙。逆もまた真なり、君子は危うきに近づく。巧まぬ手練に脱帽。

赤坂乃木坂地下鉄のあやめかな　　陽一

「赤坂」「乃木坂」は地下鉄千代田線の駅名。同線は文字どおり、首都のど真中を東西に、日本の近現代史に名をとどめる地を貫通する。沿線には明治神宮、迎賓館（元赤坂離宮）、旧乃木邸等々名をあげる暇がない。新国立美術館は旧赤坂聯隊跡。乃木坂の二つ先は「明治神宮前」、神宮内苑の菖蒲園は丁度、菖蒲、あやめの花ざかり。ふつと、明治以来の国の歩みを振り返るのである。

忘るまじ太宰忌は又富栄の忌　　幸一

太宰忌は、即ち、太宰と死を共にした山崎富栄さんの忌日。「太宰忌」の集いは今に盛んだが、その名を記憶する人はおそらく稀だろう。入水後の新聞写真で見た、大

降りで増水した玉川上水縁に娘を探す父親の長靴姿が思い出される。

桜桃忌今日の一日は津軽弁　　弥栄子

句の主は太宰と同郷と見る。せめて忌日の今日一日は、ふるさとの津軽弁を遣って、同人を偲び、死を惜しむ。それにしても死後六十五年、太宰の人気は衰えない。忌日の催しには、主に女性のようだが、随分集まる。文人筋ではその才を買うようだが、世の男たちの受け止めは、比べて覚めている、いやさまざまか。

豆御飯ツタンカーメンここにあり　　正美

「ツタンカーメンの豆御飯～」の上中倒置。ツタンカーメンの墓から出土したゆえにその名がある。優に三千年を遡る、エジプトの地に思いを馳せ、ツタンカーメンの王朝人になった気分になる。「ここにあり」の歯切れよさが手柄。散文倒置と切字が生む詩の不思議である。

（平25・07・09）

ハガキ句管見（第三十報）　　飯田孝三

（蓮見吟行句再見）

先便、蓮見吟行句管見を発信後、時々、諸句をながめては反芻しています。貴句「零戦の突っ込み形に蜻蛉立つ」の「～形に」、「～立つ」がやはり気になる。「～さまに」、「～止まる」ではどうだろう。「形に」は突っ込んだ状態を切りとった瞬間静止象。よって「立つ」の動的措辞が要る。「さまに」は突っ込むありさま。空間を取り込んで動。それを「止まる」でうけとめ、とんぼの止まる姿に焦点。ふと、露風・耕作の「赤とんぼ」の世界にも通う。手前みそばかりごめんなさい。

敏子さんの「蝉の穴結んでみれば七つ星」は、地の「蝉の穴」から天の「七つ星」への卓抜な想像力の展開が勘

ハガキ句三十報（07／9／14）

追いつけぬもの追ひかけて走馬燈　　妙子
問ひかけの言葉はいらず月まどか　　〃
魂棚のとなりパソコン打ってをり　　たか子
老犬の世話と散歩と手花火と　　孝三
水中花の向ふ新宿歌舞町　　〃
（麻布十番の赤い靴の女の子の像）
きみちゃん像を見守る店や初紅葉　　高志
小石川後楽園の猿茸　　〃
がらくたや猿の腰掛なる遺品　　敏子
風倒の稲田を今日も風やまず　　〃

所だが、「みれば」がやや断りすぎ、もたらすリズムの弾みは詩趣を減じないだろうか。

ところで、「はがき句管見」をつづりながら、高志さんと敏子さんの句について、日頃、感じているところを簡単に述べてみたい。（以下次号）

こちらの仲間の句、八月の句から紹介します。

八月のアラビア文字にある蛇性　小澤　房子
南瓜居坐つてゐた防空壕の屋根　小澤　房子
夏の雲汲みあげてゆく観覧車　石川シゲ子

二句目は「防空壕の屋根に南瓜が居坐つてた」もあるだろうか。（平１９．９．１８記）

お便り広場（到着順、敬称略）

前略　白金葭26号有り難く拝受致しました。我孫子日記中の久米島のお二人の詠句、普段着の句という感じでいいですね。サトウキビのほんのりとした甘さも嬉しく思いました。

（５．１　武者昭七）

先日は、昼も夜も楽しかったです。太宰治といえば、十年位前に「草の実」という俳誌に書いた小文があったことを思い出しました。これは黒田杏子さんにも送って、丁寧な手紙を貰いました。コピーしたのが、ぼくの文章です。このごろぼくはたかしさんに、しきりにつまらぬ綴方を送りつけて恐縮していますが、この辺りで終わりです。それから、「源氏物語」は立ち入るほどにもっと時間をかけて、話し合いを深めたくなります。とてもいい先生だったから、尚更そう思います。又の機会があることを、夢見ています。以上忽々。

（二〇一三．六．二三　松村幸一）

先日の句会ではお世話になりました。出句さすが秀句揃いで、限定七句選に難儀しました。本稿鑑賞は右三句にさせていただきますが、その外は、出句掲載順に翌月号に寄稿できればと思っています。御句「虻」は、句会の席では「虹」と見違い、腑に落ちぬままパスしました。なんとも面目なしです。伊藤先生の源氏はたいへん勉強になりました。緒先達のご熱心さを見習わねばと痛感しました。この度も手塩にかけられた、新鮮な野菜をいただき、有難うございました。早速、堪能しております。お礼まで。

枇杷胡瓜そして玉葱有り難く
梅雨晴の雷おこし噛みしめる

（平25．06．24　飯田孝三）

前略、「白金葭」六月号拝受いたしました。いつもながら彩基金を頂戴致し誠に有り難うございました。福井の方へ行かれた由ですが、小生も三年ほど前に郡上踊りを見てから、油坂峠を越え九頭竜湖へ出て、九頭竜湖は誓子先生の縁の深い所で、九頭竜湖へ桜を植樹する会の会

長をしていました。もともと福井県庁の要職をしていた橋本大三という人が、天狼同人だったので福井はかって天狼の牙城でした。私も何人かは知り合いがいます。九頭竜湖では

九頭竜の竜の気象の花曇　　誓子

などという句がありますが、東尋坊の句碑などもその縁からのようです。

それから越前大野へ出て永平寺へと行き、大凡同じコースで三国に一泊し、行ってきましたが、真夏の東尋坊ただただ暑いばかりでした。

東尋坊天避くる何もなし　　ひろし

光成さんにも時節柄ご自愛の上、益々の隆盛とご健吟を祈念しております。取り急ぎ簡単ながら御礼申し上げます。草々　　（H25．6．27　平野ひろし）

薔薇アーチ門に入れたる五月富士（写真より高志作）

復誌受け取りました。拝読アクテイブなそれでいて高尚な毎日だこと、と感心しきりです。古稀を越えると、誰でも自分が生きて行くのに必死な日々でしょうに!!光成さんは立派。先週は福田の法事で帰郷しました。福山オリエンタルホテルは安くて、居心地のいいホテルでした。故郷の山々は緑したたる様輝いておりました（雑木の山）又ありがとう。　　（7．3井上美智）

別世界からお便りをいただきありがとうございました。その中に気の重いこと！どうして私なのでしょう。ま、いいや、私でいいと言われるならと開き直って書きました。（中略）家の周囲にありました竹藪を切り根を起こしましたら、江戸時代（？）に住んでいたであろうボロボロの家が白日の下にさらされるが如くの状態にて、次はそれを、そこをどうするか頭の痛いことですが（費用がどれ位かかるか）次から次へといろんな事象が起きて来ます。そうそう、さる四月二十一日、高校時代からの音楽の友達が、癌告知後一ヶ月で亡くなるという悲愴な出来事がありました。（中略）さすがに一週間程ボーとして何もする気になれませんでした。が、我家はいろんなことが起きるし、嫁が二人目の子を出産の予定があったりで忙しさに追いまくられ、元気に生活しております。と、こんな毎日ですので、ガサツな字しか書けません。すみません。我が畑は草だらけ、ようやく、さつまいもも根付き草と競争しております。ひまわりも植えかえなくては、南瓜も、想像して下さい。さつまいも、かぼちゃ、草の緑の中に黄色のひまわりのみごとなこと!!と、うまくゆけばよいのですが。そうそうそれから半世紀手をつけなかった蔵の中の整理をやり始めています（先代さんが何もしていないので）。気が狂いそうになると深呼吸をしてまあ〜と自分をなだめております。なんぼでも話したくなりますが、口を閉じて手を動かしましょう。で

はこの辺で失礼します。お元気で。かしこ

（平．25．7．5　加納綾女）

拝復玉誌「白金葭」28号を拝受。

（イ）先ず、私信の私の手紙が公表されておりビックリ仰天。どうせならば、もう少し気の利いたことも書くべきであったかなと思っております。

（ロ）「海峡派」127号のこともご紹介に与り恐れ入ります。先ず右二件に関し感謝。

（ハ）ご健筆と次々に号を重ねる発刊にも敬服。マラソンの訓練と一緒で「先ずは走ること」文章は「先ずは書くこと」。俳句も三〇〇〇～五〇〇〇句と創作すると素人でもなんとかなるのでしょうか。エッセイも三〇〇～五〇〇篇と書くとその人なりのものが形成されるのでしょうか。などと思いつつ投稿しております。

（ニ）戸手ＯＢ会関東部会でも同人誌は発刊できないのでしょうか。出来ると面白いのですが・・。

（ホ）何はともあれ御礼まで。

御健康とご健筆を心から祈念申し上げます。敬白

Ｈ25－2013－7／7（日）ｐｍ06－45河村博巨）

再び「夜蛙」について

前号の拙稿「夜蛙について」を読んだ『野火』同人の小澤房子さんから、夜だって蛙は喧しく鳴くと教えられた。昔、千葉の農村に疎開した時、寄留先の周りの田圃の蛙が喧しくて、なかなか寝付けなかったという。同稿は、自宅前の田圃では夜中まで蛙が喧しく鳴いていると知らせてきた高志さんへの返信だが、兄の話と全く同じ。蛙は、夜だって鳴くのである。さて、蛙が鳴くのは交尾期、関東では四月頃か、その盛りは何日位続き、最も喧しいのは一日のうち何時頃だろう。高潮期には、妻狩りの情に駆られ、昼夜を分かたず夜半まで鳴き逸るに違いない。だが、その時期を過ぎると、鳴声は思いの外急にしぼみ、夜が更けるほどに渇れがれ、しみじみ哀れを催させる。そんな気もするのだが・・、前号に引いた角川『図説俳句大歳時記』の夜蛙の諸例句は、その辺りの機微を捉えてはいないか。ひょっとすると、別種の蛙なのかな。ともあれ、鳴き立てるのは雄蛙。来年はもう一度蛙田を囲らす方々から、蛙どもの恋のシーズンの競唱ぶりをとくと教えていただきたい。

今月の例会は勝手ですが、欠席します。別便で出句をお送りしますのでよろしくお願いいたします。梅雨明け、連日、破天荒な暑さです。ご夫妻ともども、暮々も御身大切に、ご健吟の程を祈りあげます。草々

（平25．07．10飯田孝三）

暑中お見舞い申し上げます。いつも欠席投句ですみません。7／19行こうと思っていましたら、急に交通安

全セレモニーに引っかかってしまいました。鋭意アビスタ第三学習室へ出て参ります。その時は勿論車行。

夜蛙は、当地方は水田一帯は、蛙の鳴声で一晩中にぎやかです。思わず小生は夜半の十二時・一時頃どんなだか、田圃へ行って蛙鳴く現場に行ってみます。見事なものですよ。そんな中、旧東村の田圃の中の「惠子」という赤提灯は夜蛙鳴くまったゞ中に一軒赤々と点っています。蛙の喧噪で九尾の狐はおそれをなして出て来ない。目の上の青い年増狐は出てきます。実に昼の喧騒を忘れます。苦々一献甘露く。　不一

青い田の蛙のように飲みに行く　　**啓泰**

夕蛙男の髭は羅生門　　〃

（H25．7／15啓泰）

受贈誌（七月号）

荷風忌の浅草に食ぶビーフシチュー（飛行雲67号）　駿河岳水
枇杷の尻花のかたちに蒙古班（彩20句集）　平野ひろし
味噌豆煮る泡ふはふはと盛り上がる（〃）　窪田かづ江
富士晴るゝ今朝鶯のしきりなり　（〃）　中川よし江
山裾の小学校や初燕　（〃）　中島佳久子
寒茜ツインタワーのH型　（〃）　中原芳子
アマリリスセーラー服を見せに来し　（〃）　貫名弘子
浮く枝を持てばだらりと蝌蚪の紐（〃）　平山三郎
魚籠に入れられ寒鮒の一暴れ　（〃）　三田村清子
牛虻の巨き緑眼塩の道　（彩111号）　平野ひろし
つばくらめ山背の風に翻る　（〃）　〃
わが内の活断層と霜柱　（雷魚94号）　増田陽一
合歓の花明治の時計鳴ってをり　（あすか10月号）　山尾かづひろ

俳窓評論纂

＊増田陽一さんより「雷魚」94号をいただいた。本誌は流子さんの「薊」と同じく100号で終刊されるとか。陽一さんの「タイ北部山地蝶紀行（6）が掲載された。山岳民族との会話の様子、タイ語で「今日はサワデー・カー」「有り難うコックン・カー」ということばで会話して生水を飲んだこと、ここの地はチエンライの奥地、ビルマとの国境近くは、黄金の三角地帯ゴールデン・トライアングルとよばれる世界最大の麻薬密造地帯での蝶の貴種を求める研究者の垂涎の地の話し、危険なので陽一さんは深入りするつもりはないが、陽一さんが採った蝶は、ウラキマネシヒカゲ（裏黄真似し日陰蝶）で珍品であった。夜はタイ料理専門の店に行く。床の赤い敷物に座り込み、漆塗りのお膳に並べた肉の甘煮など多彩な料理を、小さな竹篭に入れた餅米のご飯に載せて食べる。前の部隊では男たちが木製の打楽器を短調なリズムで叩いている。（続く）と書かれてある。陽一さんの紀行文をよむと芭蕉の「五月雨の鳰の

浮巣を見にゆかん」の句の現代版と思う。少年陽一とかなんとか、呑気なことを言ってはいけない。もののあはれを知る、認識するひとつの道と思われる。

＊ビックサイトの第20回ブックフェアーに行って来た。外山滋比古名誉教授の講演を聴いた。同教授の話は、乱読のすすめ、雑談のすすめがその趣旨であった。「本は近親者に上げない。本は知らない人に読んでもらうもの。顔写真は入れない。著者と読者は距離がなければならない。科学の方で云う、目指しているものではない、ふとした発見、思いがけないものを見つける、偶然の発見がある。それをセレンディピティ（serendipity）という。これに突き当たったら、人間が変るような経験だ。乱読には、その経験を得る可能性がある。あるいは色んな人との雑談において。後者は設えるのが難しい。乱読は一人でも、今直ぐできる。本がたくさんある現代は、何冊読んでもそういうセレンディピティに当らないかも知れぬ。七転び八起きかも知れぬ。それでも頑張る。その可能性は読書にある。本の中のxが自分のyと化合してxyという全く別なものが出来る。それがその人の個性となる。独創的な働きになる。独創的な文化を生み出す原動力になる。真似ではなく。本を読むことは古いことのように思われているが、ケータイやITではセレンディピティはおこらない。我々は、二千年の文化遺産を持っている。それは読書文化である。乱読が最も面白い。古典は乱読できないが今は読書の海は無限に広い。遠い読者は純粋な読者である。作者と読者が化学反応を起こして自己を発見する。はぁはぁー俺はこういうことが好きなんだなとか、こういうことに興味を持っていたのだなあと分かってくる。個性は自覚できなかったが、遠いところのものに触れて自己発見が出来る。考える力は、本を読んでいるだけでは得られないが、セレンディピティを経験すれば、自分が新しいものを生み出す創造的な活動ができる。専門知識は知識であって、考える力は、セレンディピティによって身に附くのだ。考えることは年をとらぬ秘訣である。著者と出版社と読者が居て本になる。読者の居ない本は本ではない。」と咳き込みながらの講演であった。帰って、記憶にあった昭和45年（一九七〇）中央公論社刊の『省略の文学』―切字論を読む。氏は思考を科学的な現象などに喩えるのがうまい。俳句は、絵画におけるポアンティイスム(Pointillism)点描画法とか、連句の主客の関係は、発句の作者と読者の間柄と考えて間違いない。俳句は作者と読者の間柄である。読者尊重の文芸が俳句であって、読者との共同制作の方向を模索しているのだ。それが表現形式としての切字の技法である。読者を客として立てるには、露骨な表現では失礼であろう。分かりすぎるのも客を大事にしたことにならな

い。説明は論外。「いひおほせて何かある」。万事にふくらみと含みなくては面白くない。挨拶だって同じ。「岩鼻やここにもひとり月の客」（去来）の芭蕉と去来のやりとりが『去来抄』にある。お前この句をどう思って作ったのか。去来が云うには、名月に乗じて山野を吟歩していたら、岩頭に又一人の騒客を見つけましたと。先師曰く。ここにもひとり月の客と、己と名乗り出でたならば、幾許の風流があるのだ。自称の句とするべきだ。この句は私も珍重して『笈の小文』に書き入れたのだ。これは作者より受け手の解釈を優先して、貴方が岩鼻で月をめでているほうが余程面白いのにと言われて、いや違うなどと野暮な反論をしていない。作者は読み手に服している。ここが俳句の真髄。受け手に大幅な解釈の自由を許している。このように信頼されるならば、受け手としても作者の高さに己を擬するための修養を怠れまい。その結果、作者も読者もあいきそって、互いに分かちがたい文芸上の高みに達することになる。そして俳句は通人同士の文芸という性格を次第に濃くしてゆく。これが俳句結社の目的である。そう思う。改めてそう思う。読書において作者からセレンディピテイを得るのも作者と読者の交響の結果、読者が享受できる余得である。

＊孝三さんより「文人の俳句」村山古郷著（昭和48年刊）を借りた。幸田露伴、尾崎紅葉、森鴎外、夏目漱石、泉鏡花、永井荷風、芥川龍之介、横光利一、北原白秋、室生犀星、三好達治、中　勘助、以上12人の文人俳句を出版社が選択して出版したもの。著者が石田波郷主宰「鶴」に掲載した文人は三十八人であった。五年間掛けて参考文献を読み選評を加えたもので、ここ百年の間の不朽の名をとどめる文豪、大作家の俳句はどんなものであったろうかという興味から読んで差し支えないと思う。著者は鴎外より漱石が数段も格は上としている。漱石は元々俳人であって、俳人であった漱石が小説を書いたに過ぎない。そう思って小説を読むとまた分かってくることがあると思う。漱石は貝おほひを書いた若い芭蕉に似ていると思った。滑稽洒脱な句、ユーモアのある句、例えば「達磨忌や達磨に似たる顔は誰」「叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな」（この句をもじった啓泰さんの句があったと記憶する）「寒山か拾得か蜂に螫されしは」などまだまだある。鴎外のそれと並べてみると、鴎外の句は面白くはない。「うた日記」の俳句群は、写生句であって、後の誓子先生の「黄旗」に近い。私は両大家が源氏物語に興味を示した形跡がないのを残念に思う。三好達治の俳句については、武者昭七さんの文章にも書かれてある。俳句も和歌も詩業の一部として、全集は編纂されているとか。飯田蛇笏の葬儀に飯田龍太、井伏鱒二、石原八束などと同席している写真を見たことがある。俳句から詩へ入っていった

のだ。「桐ひろ葉小学生の立ち話」の句は、西東三鬼の「緑陰に三人の老婆笑へりき」を思い出すとある。達治の句は三鬼の句に一籌を輸すると言わざるを得ないが、相通い相対照する詩趣の双方に存すると書いてある。これは著者の感興であるが、私も達治の句は、出来そうであるが、山鬼の句は出来そうにない。同感である。とかなんとか、一寸読んで感想を書けるような本ではないので、追々よく読んで紹介できたらよいと思う。

＊幸一さんから桜桃忌に因む一文を貰った。六月十九日に三鷹の禅林寺で桜桃忌が営まれる。その三週間後に鷗外忌が営まれる。献花して手を合わせ、集会室に集り文学座談会をして散会する。太宰治の墓と鷗外の墓は狭い通路の斜向いにある。桜桃忌には、鷗外の墓に尻を向け合掌する。しばらくして、鷗外忌には太宰治の墓に尻を向けて合掌する。幸一さんの「一九九八年桜桃忌」の文章は、太宰治好きの経歴を書かれておられる。無論戦前からの生粋の太宰ファンであるが、戦後太宰ファンが急に増え出して厭な気分になっていた頃、「ファンたるを秘せし太宰の忌なりけり」の一句には共感した。選者は黒田杏子さんであった。幸一さんは、木曜会に「桜桃忌やませの懸念出てきたり」「鷗外の墓が見守る桜桃忌」の二句を投句した。この所以を書いて居られるのがこの寄稿文の趣旨である。本誌の受贈誌の中に、平野ひろし先生の山背の句があるが、幸一さんは太宰治の「津軽」を最高傑作と断じて憚らないと書かれている。旅の途中やませに遭遇して実感した。もうひとつの句は、太宰が好きだが、鷗外も好きだからこの句が出来たのだ。ここは、幸一さんの文章を書き写す。「どちらに対しても深重なる愛憎相反の読みの歴史がある。ぼくの中には、太宰是ならば、鷗外非、鷗外是ならば太宰非というべきほどにも、択一を迫って問うてくるものがある。両者の文学の間に横たわる底知れぬ深淵を泳ぎかねて、いつもたちすくむ」

さて、この辺も幸一さんと文学談義をして見たいテーマです。源氏物語に加えて。

＊先の青江由紀夫さんより「山音文学」123号〔2013・6〕が送られてきた。由紀夫さん二つめの同人誌である。二十一人の同人の一番上に青江由紀夫さんがいる。俳句をかかれる方が二人居られる。評論の「日本神話研究―日本神話の礎（一）岡田雅勝著は読み応えがある論文である。古事記の天地創造までの古代日本を東アジアとの関係などから説き起こされてある。道教との関係も頷ける。八角形が天皇家と関係が深いと書かれてあるのは、昨年復元された東京駅のドームは八角形であり、明治天皇に捧げる気持ちで辰野金吾が設計したものと言われているので、そこにも天皇家との関係を首肯したことです。「八紘一宇」という言葉は聞いた覚えがある。いずれ本居宣

長の古事記伝に行きつくのではないかと思います。続くとあるので、次回を楽しみに待ちます。青江さんの「銀次郎の日記」はH25．3．20の彼岸までのこと。老人のユートピアと副題がついています。由紀夫さんお勧めの多読乱読は、本欄で書いた外山滋比古名誉教授よりも魁の提案ではないでしょうか。日記文学はキーンドナルドさんが日本文学に入ったきっかけとか、我々の学生時代に三太郎の日記などがありました。最後に「～この日記こそ我がいのちかな」と短歌で締めくくっておられるので、続きを待ちます。

三好達治を読む　V　　武者昭七

達治の詩集「花筐」に「願はくは」という一篇がある。おのれの死後の「おくつき」のありようをうたった詩であり、達治の死生観をうかがうに足る詩である。

願はくばわがおくつきに　植ゑたまへ梨の木幾株

という冒頭の連は詩の終わりにもう一度繰り返されて一編の主題を提示する。以下順に詩を追ってみる。

春はその白き花さき　秋はその甘き実みのる
下かげにねむれる人の　あはれなる命はとふな

季節の巡るごとに梨の木は白い花をつけ、ゆたかな実をつける。「下かげにねむれるひとの命は問ふな」とはひとのいのちもまためぐる季節と同じく自然のいとなみの一環にすぎないだからだ。

いつよりかわれがひと世の　風流はこの木にまなぶ
それさへや人につぐべき　ことわりのなきをあざみそ

いつからかわが身に染みついた風狂・風雅の精神もみんなこの木に学んだもの。（梨の花は中国詩人の愛したもの。三好は中国古典にも深く通じていたことはよく知られている）とはいうものの、ひとにいうほど筋道たったものがあるでもなし。梨の木に寄せる賛辞から一転我が身の謙辞へと詩は転調し、さらに詩業のむなしさ、はかなさをいう。

いかばかりふかきこころを　つくすともなにかたのまん
うたかたのうたはうかべる　雲なればやがてあとなし

おのれのうたを「うたかた」といい「うかべる雲」によそえ「やがてあとなし」というあたりに三次特有の含羞と同時に一切を流れ去るものと観ずる東洋的無常観が色濃くにじみでて清冽な諦念がこの一篇に深いかげを添えている。

しかあれ時世をへつつ　梨の木の影をつくらば

人やがて馬をもつなぎ　旅人らここにいこはん

おのれの詩業は忘れ消え去ろうともやがておくつきの木が作り出す木陰と甘き実とは旅人に憩いをもたらす事であろう。そのように思えばわがこころは安らぎ慰むとうたう。こうして詩人はもう一度わが塚に梨の幾株を植えてほしいと告げながら詩を閉じる。

「花筐」の刊行は昭和十九年。三好にとって戦時下の越前流寓の生活は困窮を極めたけれど、そのなかにあって詩人は「うたかたのうた」と断じ世俗から夏炉冬扇と退けられた詩業にかけた。

旅人の憩いの果実はおくつきの陰にねむる詩人のいのちが生み出すものとすれば、旅人の憩う梨の木かげもその甘き実も詩人のいのちに深くつながっている。いのちは四季のように循環するのである。清澄閑雅な調べと万象流転のおもいの交錯するこの詩の根底にはそんな詩人のふてぶてしいまでのおのれの詩業にかける自負と居直りが読みとれる。大阪高槻にある三好の墓域には河上徹太郎によって梨の木が植えられたという（現代詩読本三好達治・「現代の風狂」）。

芭蕉のかるみ以後（27）

光成高志

「腰間に寸鐵をおびず。襟に一嚢をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有。俗にゝて髪なし。我僧にあらずといへども、浮屠の属にたぐへて、神前に入事をゆるさず。」（野ざらし紀行）「いまひとりは、僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの」（鹿島詣）「われも秋風を聞きて衆寮に臥せば、あけぼのの空近う、読経声澄むままに、鐘板鳴りて食堂に入る。」（奥の細道）これらの叙述には、芭蕉の嘗ての僧堂生活を惜しみ懐かしむ気持ちが汲み取れるのである。その時期は、伝記空白期間の寛文六年（一六六六）蝉吟の没してから六年間を当てはめていいと思う。

蝉吟没後の芭蕉の動静については色んな説があるが、後の蕪村「洛東芭蕉菴再興記」に「四明山下の西南一乗寺村に禅坊あり、金福寺といふ、土人口々稱して芭蕉菴と呼。階前より衰微に入ること二十歩、一塊の丘あり、すなはちばせを庵の遺蹟也とぞ・・再興発起の魁首は自在菴道立子なり。道立子の大祖父坦菴先生は、蕉翁のもろこしのふみ学びたまへりける師にておはしけるとぞ」と書かれて以来、つい最近まで（昭和四十年）通説となっていた、伊藤坦菴をもって芭蕉の漢学の師とする説の誤りでることは、既に周知のことである、とされる。私

は、昔京都での仕事の帰り、金福寺に寄って見たことがある。詩仙堂の南にあり、通常の観光地にはなっていない。民家風のお堂の前庭から直ぐ東山麓に登る丘に萱葺の芭蕉庵があり、その脇の登り坂に蕪村やその弟子の墓、更に青木月斗などの墓があった。お堂に帰って座敷の鴨居に村山たか女の晒されている絵がかかっていて、ぎょっとした覚えがある。この金福寺の鉄舟和尚と芭蕉は親交があったとか、また大虫の『芭蕉翁年譜』には、寛文期芭蕉の上洛の条の季吟の所に「おりおりに行通ひて国学歌道誹諧、ことごとく研究するに、季吟も其英才と勤学の精密を感じけり。（中略）なほ諸道に渉らむとて、神道を吉田家にうけ、仏学を五山の主座南禅寺の塔頭某和尚にきはめ、伊藤坦菴に儒を学び、二条の某に医を伝はり給うて暇日ある事なかりけり」とあるのも、芭蕉の幻住庵記の「一度は仏籬祖室の扉に入らむとせし」という告白にすがってのまことらしい付け合い、或いは捏造と考えられるとされている（国文学昭和四一年四月号、芭蕉と学問、大谷篤蔵著）。京に居た伊藤仁斎との接触があれば面白いのにと考えるのは後世の私だからであって、おそらく、芭蕉は五山のどこかの禅林に身を置いて、法語や漢詩を作る才が重要視された当時のいわゆる五山文学を学んだのであろう。芭蕉の思想は、生家の真言宗から漢学の老荘思想に移り、そこから禅にたどり着いたのだ。

我孫子日記

6／21例会。6／27*久寺家中。6／30～7／1*鎌倉。7／4*久寺家中。7／5ビックサイトブックフェアー。7／12 3*萱吟行句会。7／15 4*六本木。7／19例会。

白金葭七月号（第29号）：発行所　我孫子市南新木2-14-17
編集・発行人　光成高志：TEL・FAX（〇四七一八七一一〇六八）
表紙の題字：加納綾女。写真：白金葭

*梅雨晴やゆりがみのりの陰に屈む　高志
**長き列禰宜率て潜る茅の輪かな　〃
老鶯や実朝の墓やぐら中　〃
鎌倉や木の根道行く木下闇　みち
二本ふたもとの梅の緑陰立子句碑　〃
銭洗弁天氷菓よく売れる　〃
*七夕や中学生と句を作る　高志
3*新幹線鰻の如く動き出す　〃
手に届く青き銀杏スカイバス　一艸人

保冷剤配られて座す無蓋バス　〃
恐竜の卵真夏のミュージアム　敦子
真夏日や東京駅の靴磨き　〃
モモンガもカエルも骨の涼しさよ　こい乃
ビル風に乗って香水丸の内　敏子
4*千花模様ミル・フルール撫子ミント金盞花　高志
撫子の花冠編む絵の貴婦人展　みち

編集後記：例会後、間髪を容れず本誌を発行せんと、前から準備しております。発行後、鑑賞文が届いた場合は翌月に回します。今月はそういうわけで前月号の鑑賞が多くなりました。例会後一週間を目途に発行作業を行っています。表紙の題字を加納綾女さんに書いてもらいました。はつかに右肩上がりになっております。本誌の発展の象徴と思うことにしました。